
絵画専攻

日本画領域

油画領域

版画領域

Painting Course

Japanese Painting

Oil Painting

Graphic Arts

井坂 名月子

ISAKA, Natsuko

死と宗教的意識

Death and Religious Consciousness

私は大学院の2年間を通して、死と宗教的意識についての表現を試みてきた。これは死の表現の先行研究としてクリスチャン・ボルタンスキーや遠藤利克の作品を参考にする中で、死を表現する際に宗教的意識が必要不可欠なものであると考えるようになったためだ。自作および修了制作では自身の身近にあったキリスト教的な観点を作品に投影し、横たわる鳥の羽や飛行機の尾翼を天使の羽や十字架といったキリスト教的にシンボリックなモチーフに見立てることで死というイメージを想起させることを図っている。

また、この修了制作では自身の経験をもとに、身近な死の誘惑と精神的拠り所というものをテーマに加えて制作を行った。私は精神的拠り所とは、共感のことであると考えている。精神的拠り所＝共感というものは他者と同じ景色を見ることであり、それは時に残酷な景色であるかもしれない。このことから寂しい絵作りを心がけた。



沈黙 / Silence
岩絵具、墨、膠 / 和紙、木製パネル / Mineral pigments, ink and animal glue on Japanese paper and wooden panel
145 × 212 cm



金澤 洋輝

KANAZAWA, Hiroki

芸術におけるコミュニティの必要性について

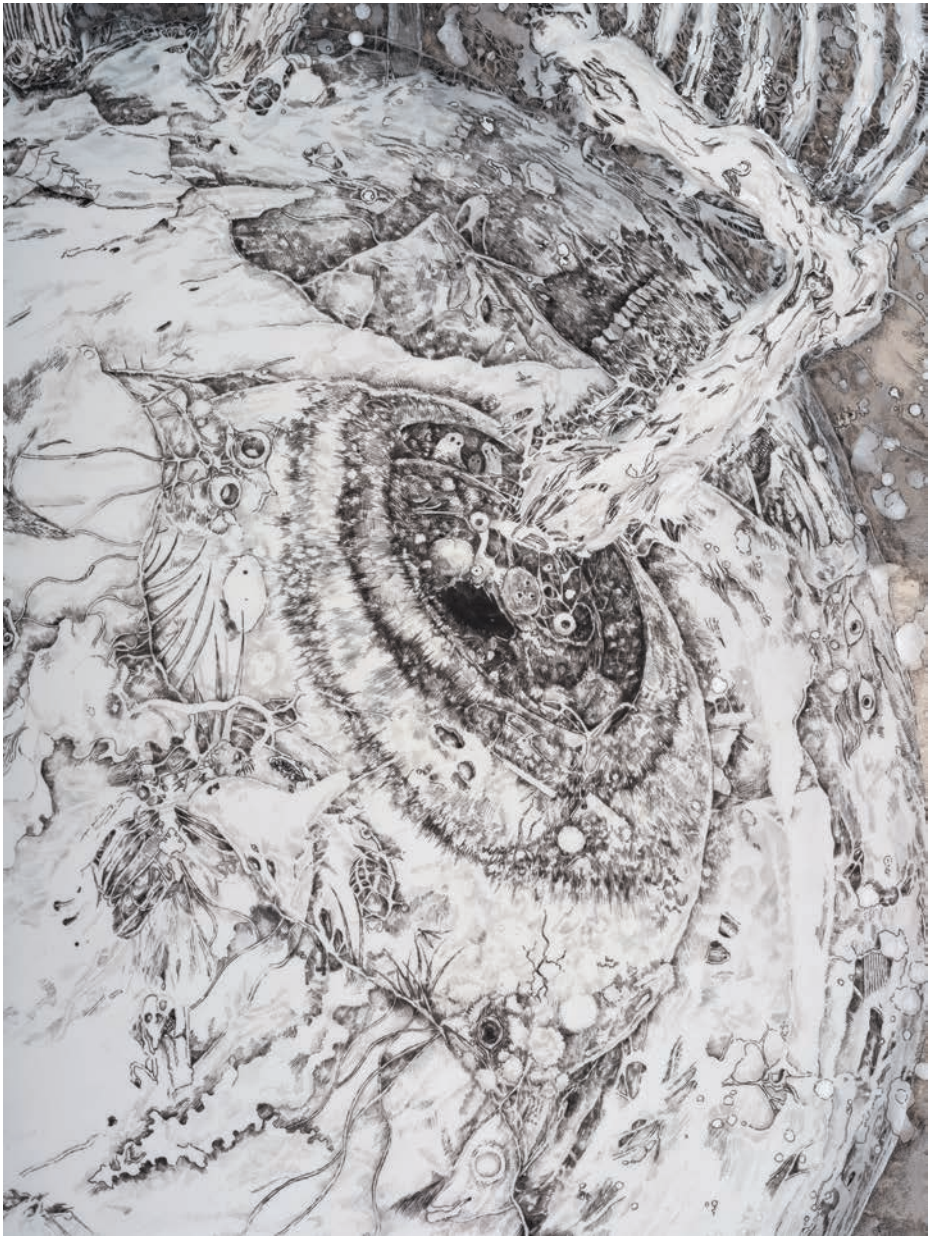
On the Need for Community in the Arts

学部生時代から研究してきた絵画によるコミュニティの必要性について表現する際のモチーフを考えていた時、偶然民間伝承のだいだらぼっちと、深海に生息する端脚類のだいだらぼっちの名前が一致する事に気づき、この2つの全く関係の無いモチーフで『現実のモノから生まれる幻想』を描きたいと思い制作しました。民間伝承におけるだいだらぼっちは山や湖沼を作ったとされる、所謂土地作り

の怪異として有名な怪異です。その為、既存の生物とは生まれ方も違うだろうと思い、ありとあらゆる生物、またはそれを構成するものが肉体を構成し、深海の実在する生物から産まれる瞬間を描いています。そして、誰かののとしての居場所を作る幻想としていつかこの赤ん坊がいつか誰かの居場所を作り、その子自身が誰かにとっての居場所になって繋がれたらといった思いを込めました。



だいだらぼっち / Daidarabocchi
 墨、モデリングペースト、ペン / 雁皮紙、高知麻紙 / Ink, modeling paste and pen on gampi paper and Japanese paper
 116.7 × 91 cm



神山 侑子

KAMIYAMA, Yuko

見えない心を模様で表現する

Expressing the Invisible Mind with Patterns

私は人間の本質は心の弱さであると同時に、それらは全て自然や宇宙とも繋がりが合っているものだと考える。私の今までの作品は、木々に囲まれた自宅周辺の植物を観察し記号化した模様を無数に描くことによって自身の内面を表現するものであった。模様を描くことは私にとって心を打ち明ける行為であり、岩絵具の鮮やかな色彩がそこに寄り添ってくれる。さらには鑑賞者の心が共感し「癒し」へとつながる絵画作品をつくることが私の研究テーマとなっている。

「命の中にあるもの」は東洋哲学を学び取り入れた価値観と私の死に対するイデオロギーに基づき描いたものだ。相反する存在が互いに溶け合い、時には争いながら世界を構成しているという陰陽的な思想と、我と宇宙が同一であることを認識する梵我一如の思想である。さらに、我が家の祖先を大切にする習慣とも結びつき、人の死と自然の間に生まれるダイナミズムに迫ろうとした作品だ。



命の中にあるもの / The Essence within Life / 岩絵具、水干絵具 / 高知麻紙 / Mineral pigments and dyed mud pigments on Japanese paper / 182 × 360 × 3.2 cm

川端 もくは

KAWABATA, Mokuha

遠近法と色材・基底材による奥行き表現の研究と実践

Research and Practice of Perspective and Depth Expression Created by Color Materials and Supports

様々な色材は繊維質の和紙という基底材の上に積層したり、中に擦り込まれたり、下に沁み込んだりし、そうした色材の様々な定着の仕方は、触覚的で抽象的な奥行き感覚をもたらす。そこに図法的な遠近法を組み込み、抽象と具象を重ねることで、私たちの住む街にありふれ見捨て去られてしまう道端や空き地の植物のある風景が野生の庭であるかのような絵画空間を表現しようと制作してきた。

この作品は岩絵具や植物染料等ばら撒かれた色彩の上に、三つの壁に囲まれた一点透視図法的な空き地の空間と、そこに実際に繁茂していた高さ 5m 以上になる桐の幼木を見る人との距離的な親密さを表現するため、琳派や狩野派の屏風絵・襖絵を参照しながら画面を上下に木が突き抜け縦断する構図を向かって右側に構成し、区切られつつも上下左右、奥、また鑑賞者の方へと広がっていく空間表現を試みた。



杉並区西荻南2丁目、ボクシングジム前 / Nishiogiminami 2-chome, Sugunami-ku, Tokyo, in front of the boxing gym

岩絵具、水干絵具、植物染料、木炭、パステル / 三彩紙

Mineral pigments, dyed mud pigments, plant dyes, charcoal and pastel on Japanese paper

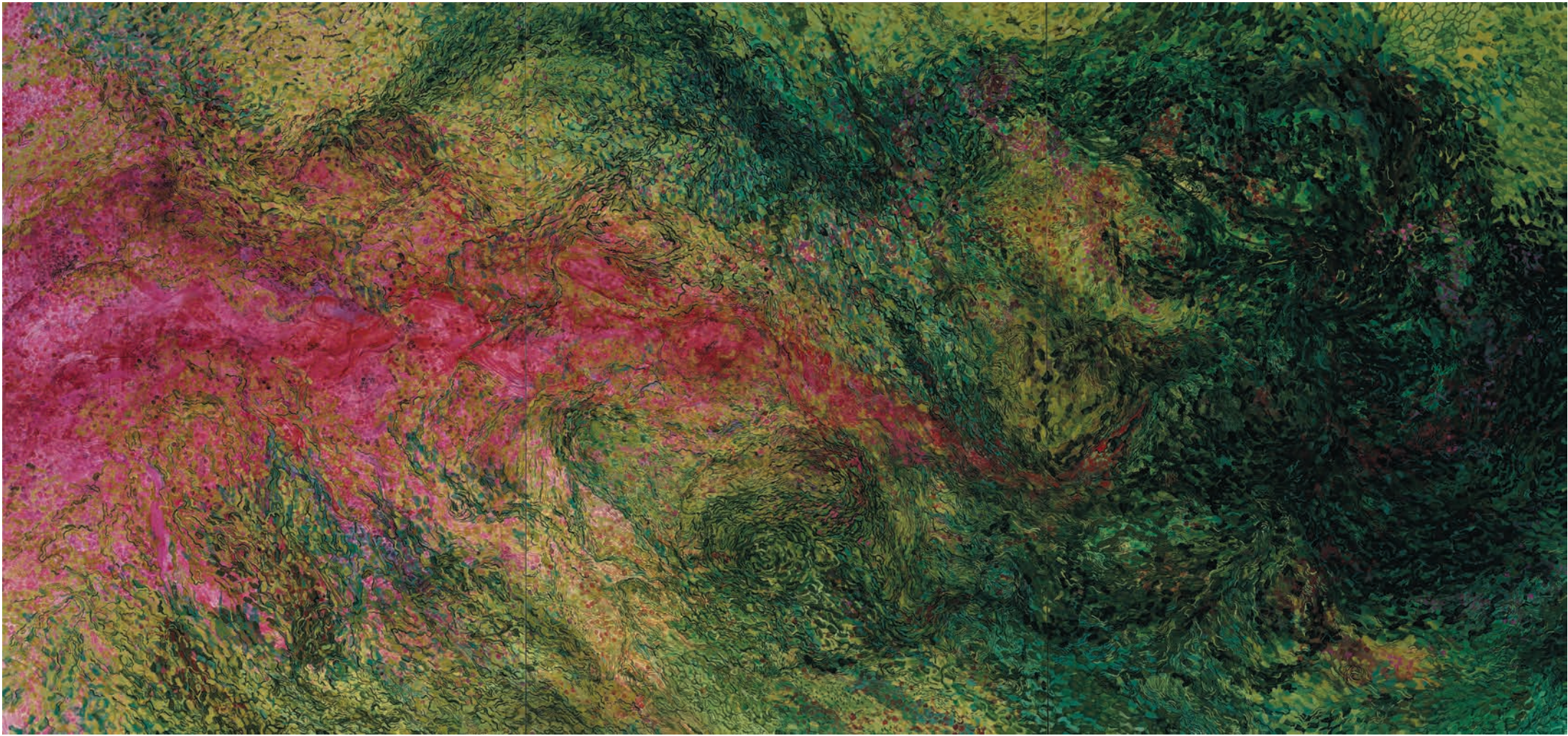
200 × 366.8 cm

北野 茜

KITANO, Akane

ミクロとマクロを接続する

Connecting Micro and Macro



cell series "days"

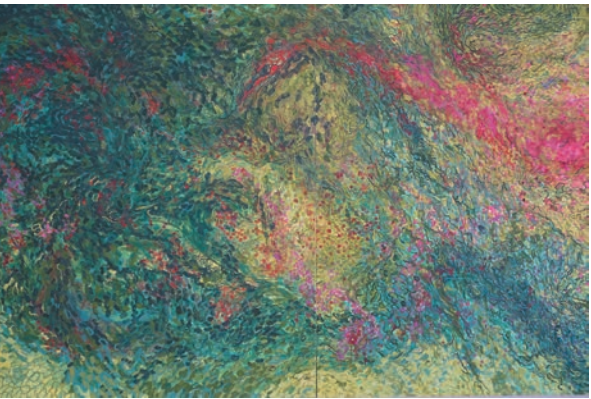
岩絵具、染料 / 和紙 / Mineral pigments and dyes on Japanese paper
182 × 390 cm / 2023

私は「ミクロとマクロの接続」をテーマに日本画を制作している。個人が世界を形成している最小単位であり、その延長線上に世界があるということに実感を得ることを目標としている。ミクロである個人のマクロが世界であり、世界に接続しているという実感の先に生の実感があると考え。生物の最小単位である細胞で大画面を作ることでミクロとマクロを接続している。

岩絵具は自身でコントロールしようとしてもできない表情をもつ画材だ。自然と画面の中で自分の意に反した表情に出会うことができる。また、この作品は5ヶ月の期間で描かれている。長期的に画面と向き合うことでその間の自身の内面の変化が画面に意図的でない複雑さを与えている。画材と時間という制御が難しいものを取り入れることによって絵に複雑さを出すことに成功した。



展示風景
2023 年度卒業・修了制作展 A 日程 選抜展 多摩美術大学アートテーク
縦横どちらの構図でも展示可能 この展示は縦構図で展示



cell series "days"

清水 巴月

SHIMIZU, Hazuki

記憶の記録

時を刻む行為について

Record of Memory
On the Act of Marking Time

記憶を記録することは、それが個々の行為として始まったとしても、制作をすることで、その時そのものを、何かに刻み残すことです。自分から離れてでていったものは、何を言うわけでもなく無言ではありますが、それは私たち人間よりも半永久的に残り続けます。私はそれが、確かに何かに訴えることができると思っているし、それを望んでいます。

この絵を見た時に、この場所に戻って来られる絵にしたかった。それを望みながら制作をしました。そこには何に

も変え難い何かがあります。私にとって描く行為とは、変えがきかない記憶を自分に記録しながら、作品としても世の中に記録していくことでした。

これからの私の制作は、まだ自分の為の行為であるかもしれません。ですが、それが半永久的に残ることで、将来誰かがこの作品を目にした時、無言で佇むものから何かを感じて欲しいという願いを込めて制作し続けていこうと思っています。



はじまり / The beginning
岩絵具、水干絵具、胡粉 / 雲肌麻紙
Mineral pigments, dyed mud pigments and whiting on Japanese paper
200 × 330 cm

孫 晨

SUN, Chen

鏡と世界

日本画技法を用いた鏡と世界をテーマとする絵画表現

Mirrors and the World

Painting Depicting Mirrors and the World with Japanese Painting Techniques as the Theme

私は他人との関係の中でしか自分自身を認識できないと考えている。鏡に映る自分を見るように、他人に映る自分を通じて、自分自身を知るからである。新型コロナウィルスの影響で、2020 年 2 月から半年ほど、私は殆ど誰にも会えない生活を経験した。誰とも接しなかったこの期間は、自分自身の認識がどんどん薄れていき、この世から私が消えていってしまうような感覚が常にあった。その後、現実友人と再会できたとき、私はやっと自分の存在を感じることができたのだ。私が子供の頃、鏡を凝視する時に自分

が鏡の中の世界にいると感じたことがある。もちろん当ても、自分が写っている鏡に触れることで、鏡の中の私は本当に存在していないと発見することはできた。

私にとって世界は大きな鏡である。ただし、鏡の中の映像に夢中になり過ぎ、それを自分のことだと思い込んでいた。私は「子供のようにつできるだけ目の前の映像を具現化したい、目の前の鏡を描きたい、鏡の中の私をみんなに見せたい。」という欲望に駆られている。

部屋 / Room

岩絵具、水干絵具、銀箔、胡粉 / 高知麻紙
 Mineral pigments, dyed mud pigments, silver leaf and whiting on Japanese paper
 364 × 182 cm



唐 若琦

TANG, Ruoqi

作品と記憶

Artworks and Memories

筆者は昔から自伝的エッセイや絵での生活記録に興味を持っているため、本研究では過去の体験に基づき、影をモチーフとし、日常の断片をテーマに制作を行う。その場の感情を作品で記録し、画面に内的な感覚をもたらし、情緒と物語性を感じさせることで、人々の共感を呼び起こし、作品による私的領域における記憶喚起と公的領域の記憶共

有を実現するのが研究の目的である。過去の記憶は人の感情に直結しているとされているため、記憶に関する研究が必要だと考える。どのように作品を通じて記憶喚起をするのか、他者と記憶を共有するのは何が必要かについて考察していく。



残像 / Afterimage
胡粉、水平絵具、岩絵具 / 雲肌麻紙 / Whiting, dyed mud pigments and mineral pigments on Japanese paper
162 × 112 cm / 130.3 × 162.1 cm



中村 冴子

NAKAMURA, Saeko

抽象表現を用いて人間という存在を描く

Drawing Human Existence Using Abstract Expressions



light of wish
 岩絵具 / 雲肌麻紙 / Mineral pigments on Japanese paper
 182.7 × 275 cm

私は制作において、抽象表現を用いて人間の感情、思考をレイヤーとして捉え描く事を目的としている。人間という存在は、一点の視点からは捉え切れない複雑な構造物である。またそれと同時に多様な感情と思考を持ち、明と暗を併せ持つ矛盾の存在だ。

その矛盾の中でも、私は明が強くあって欲しいと願っている。即ち私が描くものは目の前にある現実ではなく、自

らが望む虚構である。それが虚構であるという認識を持ちながらも、どこかで、自分に対しても、他者に対しても、世界に対しても、私は希望的観測を抱いている。

多角的な構造物としての人間を完全に理解する事は難解であり、これらを理解する事は私にとって永遠の課題だ。私は制作を通して一生自身という人間と他者という人間、そしてそれに接する世界と向き合っていく所存である。



light of prayer
 岩絵具 / 雲肌麻紙 / Mineral pigments on Japanese paper
 182.7 × 275 cm

南雲 未希

NANKUMO, Miki

島から「場」について

「場」と人のつながり、人と人のつながりについて

About *Place* from an Island

Regarding the Connection Between *Place* and People, and the Relationships among Individuals

香川県の讃岐広島、その島の人々との出会いを機に「場」について考え始めた。“自分が自分としてここにあること”を強く実感させてくれる「場」の力のある島だが、深刻な過疎高齢化に直面しており、失われつつある「場」である現実を感じざるを得ない。「場」が自身の形成と結びついている実感をもつ私は、この島をはじめ、失われつつある「場」が地方を中心に多くある現状に対し、自身の一部分が欠けていく様な危機感・喪失感を絶えず感じている。「場」

が人を育むように、人が「場」を育む。「場」をただ利用する外側の人としてではなく、「場」とともにある内側の人として「場」を育み、そこに新しい「場」と人のつながり、そして人と人のつながりを築いていく。そのような人になっていきたい、その様な作品を制作していきたい。いつか、別々の者たちが同じ場で同じものを見、その場をともに大切にしたいと思うことができればいい、そんな希望を持って描いた。



いつか 同じものを見れたら 同じ島になれば / Someday If We Can See the Same Things If We Can Become the Same Island

岩絵具、水干絵具 / 雲肌麻紙、高知麻紙、三彩紙 / Mineral pigments and dyed mud pigments on Japanese paper

162 × 663.8 cm

許 柔我

HUH, Youah

日常的モチーフの再構成による心象風景

多視点を中心に

A Mental Scenery by Reconstructing Everyday Motifs
Focused on Multiple Perspectives

日常から見たモチーフを多視点を通して制作した心象風景を研究してきた。多視点をを用いた風景は経験と記憶による主観的な視線を基にするため、現実の見え方とは異なり、変容されるが、写真と違う絵画の力を用いて、私が見ている、あるいは見てみたい世界を絵の中で再現して制作を行っている。修了制作では、三次元的な空間表現のために多視点を通してモチーフそれぞれの大きさ、モチーフ同士の位置やそのすきまの調和を考えながら私が思うワンダーランドの風景を描いた。



ワンダーランド / Wonderland
岩絵具、箔 / 高知麻紙 / Mineral pigment and metal leaf on Japanese paper
194 × 390.9 × 3.5 cm

星 萌

HOSHI, Moyuru

絵画の中での空間と感情表現

空間と感情と余白の結びつきについて

How to Express My Emotion in the Picture

About the Connection of Space, Emotion and Margins

私にとって絵を描くことは日記を書くような感覚で、その時の感情や出来事を残している。大学院での2年間は、いつか消えてしまうものと残りつづけていくものが共存していることへの違和感を感じることの多い期間だった。その気持ちを残すためにこの作品を制作した。言葉で感情表現することが苦手な私にとって、絵を描くことが1番心を開ける表現方法だった。



残りつづけるもの / remains

岩絵具、水干絵具、パステル、色鉛筆、紅茶 / 雲肌麻紙

Mineral pigments, pastel, colored pencil and tea on Japanese paper

182.7 × 183.4 × 3 cm

李 姝凝

LI, Shuning

「此地」としての植物

日本画における記憶・情緒の絵画表現研究

Plants as *This Place*

A Study of Memory and Emotional Expression in Japanese Painting

私は修士2年間には、「此地」として植物と、ありふれた日常のものをモチーフにすることを通じて、記憶と情緒の絵画表現を研究する。画面の中にいっぱいある植物たちは、私の故郷重慶といま住んでいる東京、共通にもある植物である。この植物たちは同じ気候の地域の間で流れている。例えば、私の作品の中によく見られるビワの木、リンゴ、マドカズラなどそうである。私の故郷は枇杷の原産地で、世界の中の枇杷の木の種も故郷からのものである。故郷の以外のところで見たら、故郷から久しぶりに手紙が来た時のようであり、不思議な気持ちになった。

東京の気候は故郷と同じような感じを持って、ほぼ同じ雰囲気や形の植物が生えていて、見た瞬間時間と空間を超え、故郷に戻ったような感じだと思う。この親近感のある植物たちは故郷と他の地域の架け橋になり、この二つの土地は繋がっていると思う。ほぼ同じ植物だけど、違う土地で育てられたものは、微妙な違いがある。文化でもこういう同じようで微妙に違うものがある。そして、私の作品は、故郷と以外の地方といった複数の文化が交差する際に、この二つの繋ぐ、自分のいる「此地」になると思う。



此地I / This Place I
和紙、岩絵具、水干絵具、胡粉、クレヨン、銀箔
Mineral pigments on Japanese paper, dyed mud pigments, whiting, crayon, silver leaf
182 × 273 cm



此地II / This Place II
和紙、岩絵具、水干絵具、胡粉、クレヨン、銀箔
Mineral pigments on Japanese paper, dyed mud pigments, whiting, crayon, silver leaf
182 × 273 cm

葛 玲瑋

GE, Lingwei

日本画制作における「心象の美と時刻」の表現と考察

Expression and Analysis of 'Beauty of Impressions and Time' in Japanese Painting

「美」は人々の意識に現れる結果である。人間の内面は多様で変化に富んでおり、美の認識は瞬時から始まり、その後、時間をかけて味わい深くなっていく。個人的には、美は現実と想像の間に存在すると考えている。たとえば、列車の窓からあつという間に見た景色、瞬く間に過ぎ去る夕焼けや、木漏れ日と風に揺られている枝の影など。これらの景色を記録しようと思っても、完全に再現することはできない。この景色を記録しようとするプロセスにおいて、「かつて心に響いた美」に対する私の追求は、現実に対する記憶を基に、現実を美化することを行っている。

作品を読むと、粒子の細かさや粗さによって異なる岩絵具、層にわけて透明感が見え、これによって画家の制作プロセスを感じ取ることができる。どのような思考の変化を経たかは、色の塗り方、押し付け、削り、転写、筆の動きによって形成される岩絵具の粒子の軌跡から、直観的に見える。これにより、深遠で複雑な人間の考えや思い、心の美が極限まで表現され、さらに具体化されるのである。構図や色彩だけでなく、素材そのものにも豊かな表現力があり、画面から伝えられる情報量が増える。私は、日本画は心象の美を表現することに非常に適していると考えている。



咲 / bloom / 岩絵具、水干絵具、パステル、銀泥、銀箔、胡粉、膠 / 雲肌麻紙、木製パネル
Mineral pigments, dyed mud pigments, pastels, *gindei*, silver leaf, whiting and animal glue on Japanese paper and wooden panel / 170 × 354 cm